

# 生徒の主体的な参加を促す「考え、議論する」道徳教育プログラムの開発

宇佐美公生・室井麗子\*、佐々木聡也\*\*

\*岩手大学教育学部，\*\*岩手大学教育学部附属中学校

(平成30年3月2日受理)

## I. はじめに

本研究は、平成30年度から教科化される「特別の教科 道徳」において、学習指導上最も大きな変更点である「考え、議論する」道徳の要素を、どのような形で学習活動の中に組み込むか、その方法を、道徳を学ぶことの本来的意義に立ち帰りながら、「哲学対話」やアクティブ・ラーニングの研究成果を取り入れつつ開発・検証し、その課題を明らかにすると共に、評価方法も含めて新たな提言を行うことを目的に遂行されたものである。

以下では、プロジェクト担当者がそれぞれの教育現場において行った実践及び検討の結果を報告し、最後にまとめとして成果と考察、今後の課題などを示すことにする。

## II. 「考え、議論する道徳」の授業——中学校における実践

佐々木が担当する岩手大学教育学部附属中学校の道徳科では、「考え、議論する道徳」の実現に向け、「物事を多面的・多角的に考える議論の在り方」と「自己の考えを深めるための表現・言語活動」の二つの側面から、実践を行った。

### (1) 「物事を多面的・多角的に考える議論の在り方」の実践

#### ①ねらいと具体的な手立て

本実践のねらいは、「自分と異なる意見と向かい、多面的・多角的に考え議論することを通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり、広げたりする」ことである。全国の様々な実践で「多面的・多角的」という文言を目にするが、「多面的・多角的な考え」と「様々な考え」の区別がされているものは多くないように思う。授業者がその時間の中での「多面的・多角的」な考えとはどのようなものを指すのか、またそのような考えを生徒に持

たせるためにどのような手立てを取るのか、これらを明確にすることが重要であると考え、以下の二つの取り組みを行った。

#### ②実践の内容と成果・課題

一つ目は、道徳の授業の中に、問題場面や葛藤や衝突が生じる場面を設定することである。いわゆるモラルジレンマ教材だけでなく、読み物資料においても、主人公の心情や行動の是非、それらの根拠など、多様な考えが表出される資料は様々な形で見いだすことができる。その際、そこで生じている問題がどのような問題であるかに配慮して扱う必要があるが、実践では以下のような分類をした。

- ㊦道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題
- ㊧道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題
- ㊨道徳的諸価値のことは理解しているが、実現しようとする自分とそうできない自分との葛藤から生じる問題
- ㊩複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題

成果として、副読本などの物語を教材にした授業であっても、主人公の心情に寄り添うだけの道徳ではなく、問題場面に直面し、解決に向けて考え、他者と議論する過程で、多面的・多角的な考えが出てくる授業を行うことができたと考える。また、主体的に問題の解決に臨もうとする生徒も増えたように思う。課題として、物語の主人公に学習者をどこまで投影させるか、ということがある。「自分が主人公なら」と「自分なら」は似て異なるものであり、これらが授業中に混在すると、議論がかみ合わなくなるケースがある。特に主人公の人物像が明確である場合に起こりやすいことが分かった。授業者は、学習者を主人公にどこまで投影させるのかを明確にして授業に臨むことと、発問の吟味が必要であることが分かった。

二つ目は、意図的に生徒の考えを広げる発問や

問い返しを工夫することである。授業者の発問に対して生徒が考えを述べたとき、「他にあるか？」と多様な考えを求めただけにとどまらず、

「主人公のどのような行動からそう思ったか？」  
「自分がその立場でもそう思うか？」  
「〇〇の立場から見てもそう言えるか？」  
「いつでも、どこでも、誰に対してもそう言えるか？」

など、視点や立場を変え、より深い問い返しをすることを意識して授業を行った。

成果として、このような問い返しを行ったことで、生徒から意図的に多面的・多角的な考えを引き出し、議論に深みを持たせると共に、生徒自身が物事を多面的・多角的に考える視点を与えることができたと考える。「人それぞれ、様々な考えがある」という漠然とした他者理解から、「〇〇はその視点から意見を述べていたのか」と、視点や立場を理解した上での他者理解へと深化した生徒が多く見られた。また、「自分には〇〇という考え方はなかった」、「〇〇という立場の人もいたが、やはり自分は…」というように、自身の考えを深める根拠として、他者の考えを用いることができる生徒も増えたのが成果である。課題としては、生徒同士のやり取りよりも生徒と教師のやり取りが多くなりがちになることである。多面的・多角的な考えを引き出すために、教師主導の授業になってしまった。授業を重ねるうちに、教師の問い返しが生徒同士の議論の中で出てくるように生徒を鍛えていきたい。



資料1 自分の立場と考えを明らかにし、考えを発表する生徒

## (2)「自己の考えを深めるための表現・言語活動」の実践

### ①ねらいと具体的な手立て

本実践のねらいは、「他者と協働したり、自己の最終的な考えを記述したりする際、話し言葉と書き言葉を意図的に取り入れた表現活動を行い、生徒が自己の考えを深められるようにする」ことである。

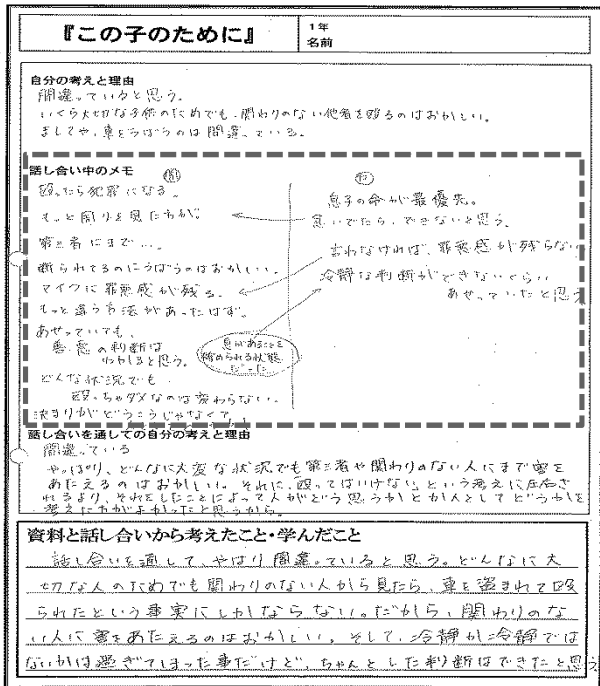
話しことばには、無意識的・無自覚的な要素があり、情動的な機能が働きやすいという特徴がある。問題解決過程の協働場面では、生徒の話し言葉を重視し、その学習過程での思考の流れを端的にメモさせるなどし、論理的な言語に置き換えられないような工夫をした。その方が、自身の考えを素直な言葉で書き表すことができ、単なる板書の書き写しや仲間の考えの転写に終始する話し合いではなく、心の通った深い議論ができると考える。また終末では、協働の中で十分に練られた価値観の意識化と再構築を図るために書き言葉を用い、じっくりと論理的に整理させるようにした。このような表現方法の使い分けによって、生徒の思考に寄り添った授業を構築するよう試みた。

### ②実践の内容と成果・課題

資料2は、複数の道徳的価値が介在することによる道徳的問題を解決する授業のプリントである。記述した生徒は、破線で示した部分において、議論中に情動的な話し言葉でメモをしている。メモを取りながら、それぞれの立場の対立する点はどこかといった点にも着目し、線をつなぐなどの記入をしている。また終末では、話し合いでのやり取りを含め、改めて自身が考えたことを、根拠などを整理しながら書き言葉でまとめている。

成果としては、仲間との問題解決の過程をたどり、振り返りで自分自身が選択した道徳的価値を、より強固なものに再構築する記述や、逆の立場を理解したうえで現在の価値を選択するといった記述が多く見られたことである。課題としては、話し合い中のメモの欄に何を書いてよいか分らず、記述量が少ない生徒や、板書の書き写しや仲間の考えの転写の癖が抜けずにいる生徒がいることである。学習シートの書き方指導が、生徒の道徳的な思考を促すことにつながるので、継続し

て指導を行っていく必要がある。



資料2 生徒の学習シートの記述

### Ⅲ.「考え、議論する道徳」の授業——「哲学対話」という方法の活用

室井が担当する今年度（平成29年度）の教職実践演習「学習の指導：道徳」では、「哲学対話」を活用し児童自身が「考え、議論する」活動を中心に据えた小学校「道徳科」の授業を受講生に立案してもらい模擬授業を実施した。

#### （1）教職実践演習の流れ

まず、①受講生とともに、「子どものための哲学教育」や「哲学対話」が提唱されるに至る歴史的背景やその理論的ポイントについて、さらには「哲学対話」を用いた道徳の授業を実施するにあたっての教師の役割について、確認した。

従来、道徳の授業では、「問う」ことは教師の重要な役割と捉えられ、教えるべき道徳的価値を児童生徒が自覚し内面化することを促すための効果的な「発問」をいかに構築するかが、道徳教育の実践的課題と見なされてきた。しかし、子どものための哲学教育の方法である「哲学対話」においては、児童生徒自身が「問う」主体となる。したがって、哲学対話を用いた「考え、議論する」道徳の授業では、教師は、児童生徒が自分たちで「問い」「問い合い」「議論・対話する」ことを手助け

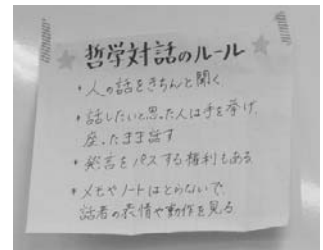
し促すという役割を担うべきであり、このような方向性で教師の役割を転換していくことが重要となる。

次いで、②3～4名ずつ3グループ（A～C）に分かれ、グループごとに道徳の授業を立案・指導案を作成し、③模擬授業を実施し、④模擬授業のカンファレンスを行った。

#### （2）模擬授業

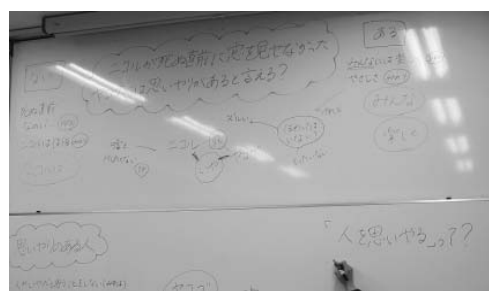
##### ①Aグループの模擬授業

Aグループは、第6学年を対象に、「親切、思いやり」を主題に設定し、誰に対しても思いやりの心をもち相手の立場に立って親切にすることをねらいとし、『カーテンの向こう』を教材に用いて、授業を立案・実施した。



Aグループ①

『カーテンの向こう』はイスラエルのある病院の病室を舞台にした物語である。登場人物の一人ヤコブがついた「優しさからの嘘」は思いやりなのか否かをめぐる議論を主軸に、「相手を思いやる」とはどういうことなのか、といった問いについて考え議論する授業が展開された。



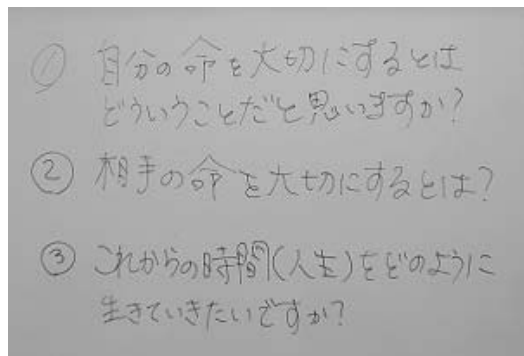
Aグループ②

##### ②Bグループの模擬授業

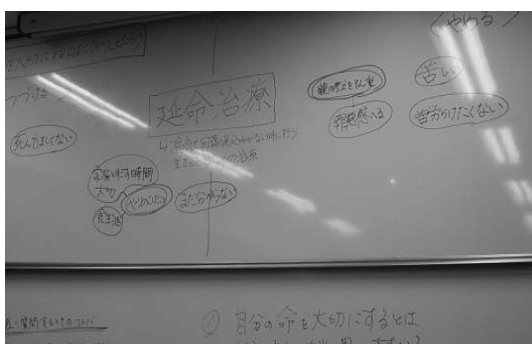
Bグループは、第6学年を対象に、「命の大切さ」という主題を設定した。「延命治療」を取り上げ、自己の命と他者の命を大切にすることを育み、自己の生き方を考える態度を養うことをねらいとして授業を立案・実施した。

ある家族の、「延命治療」をめぐる葛藤と決断を取り上げたドキュメンタリー映像を教材に、自ら

がその立場に立ったらどうするかという点について考え議論することを通して、命について考える授業が展開された。



Bグループ①



Bグループ②

### ③Cグループの模擬授業

Cグループは、第6学年を対象に、「嘘」という主題を設定した。自分の思いを表現できる、思いやりをもって生きる、物事を多面的・多角的に捉える思考を引出し、道徳的諸価値や自己の生き方について自信を深める、このようにねらいを定め授業を立案・実施した。

教材は特に用いず、各自が抱えている「嘘」に対するイメージから様々な状況下での「嘘」へと議論が展開された。その中で、「嘘」には様々な位相があること、「嘘」は一概に悪いものではなく、むしろ様々な人間関係の中でその機能が変化するということが授業参加者たちに自覚され、多面的・多角的に「嘘」を捉えることで人間関係の多様なあり方を認識するという授業が展開された。

### (3) 授業カンファレンス——「考え、議論する

### 道徳」の授業方法を中心に

模擬授業を実施後、「考え、議論する道徳」という観点から、それぞれの模擬授業についてのカンファレンスを行った。まず、評価点として下記のもの挙げられた。

- ・「思いやり＝善い」や「嘘＝悪い」という一面的な見方ではなく、議論を通して、様々な状況下で、様々な立場から「思いやり」や「嘘」を思考することで、それぞれについての多面的・多角的な認識が可能になる。
- ・「延命治療」をめぐる考え議論し、多様な立場に立った見解や思考を交換し合うことで、「とにかく延命治療はすべきだ/やめるべきだ」ではなく、「命」や「死」をめぐる葛藤を実感することができ、葛藤を克服し乗り越えるというよりも、むしろそれを受容することが可能となる。

一方、課題としては、下記の点が挙げられた。

- ・「児童同士の対話」ではなく「教師と児童との対話」になってしまう。
- ・対話が深まらず「たわいない会話」に終始してしまう。

「考え、議論する道徳」の授業を実施するためには、児童生徒同士の議論や対話を促す教師のスキルを明確化した上で、それをどのように養成するかが今後の重要な課題となるであろう。

先述のとおり、従来の道徳の授業では「問う＝発問の主体」は教師であり、予め設定された授業の着地点に向けて児童生徒から周到的な応答を引き出す発問をいかに構築するかが重視されてきた。「考え、議論する道徳」の授業を実践するためには、このような授業観を抜本的に変換する必要がある。「考え、議論する道徳」およびその方法としての「哲学対話」では、問う主体は児童生徒自身であり、教師には、児童生徒が問う主体となるための支援としての問いを構築することが求められる。

この点に鑑みれば、児童生徒の予想外の反応や応答に対する軌道修正のためのスキルを教師に求めてきた従来の道徳授業に対して、「考え、議論する道徳」の授業では、児童生徒の予想外の反応や応答という「偶然性」を、個々の児童生徒自身の問いの深化へと導いていけるような臨機応変的ス

キルが要請されるであろう。そのようなスキルの内実の解明については、今後の研究課題としたい。

模擬授業のカンファレンスから明らかになった課題をもう一点指摘しておきたい。

「考え、議論する道徳」の授業を実践するにあたっては、授業で取り上げる題材を、どのようなアプローチで、どのような次元において展開するかも課題となる。例えば、Bグループが取り上げた「延命治療」は、児童にとっては「延命治療について選択する／選択しない」という「具体的な立場」に立つのはかなり難しい。この場合、具体的にその立場に立って考えさせるのではなく、むしろ、「死ぬという事をどのように考えるか」や「いのちは誰のものか」といった「抽象的な次元」で授業を展開した方が、児童の思考や議論・対話が活性化すると考えられる。取り上げるテーマや素材を、児童生徒に合わせてどのような次元でどのように展開するか、そのための研究が、「考え、議論する」道徳科の授業においては一層重要になってくるといえる。

#### IV まとめ

佐々木の実践においては、生徒たちに思考や議論を促す問題を類別し、「考え、議論」する必要性を喚起できる教材をどのように選び、授業者がどのような発問を行うかによって、生徒に多面的・多角的な思考を促すことができるかが検討された。問い方の工夫により、生徒の考えや議論を促し、深める可能性が確認された一方で、教師と生徒とのやり取りに傾きがちで、生徒同士が自ら問い、考え、相互に議論するところまでは至っていない点が課題として確認された。同じことは室井の研究報告からも確認できる。しかし何の知的土台もないところで生徒自身が問いを立て、相互に議論をしても、対話が深まらず「たわいのない会話」になってしまうのも無理からぬところがある。その意味で、初発の段階ではどうしても教師が問い、生徒が答える形のやり取りにならざるを得ないにしても、そうした経験を適切に重ねることで、生徒の主体的な問いや思考、議論の能力を

育成する可能性は残されている。その際、重要なものが、佐々木も室井も確認しているとおおり、授業者の側の技倆・スキルである。生徒の主体的な問いを促すためには、例えば「生徒の問いを促す問い」の作法のようなものもファシリテーション技術として身につける必要があるであろう。しかし、それに加えてやはり教師自身が「哲学的対話」の作法と倫理学と論理的推論に関する基本的な知識・技量を身につけておく必要がある。そのことは哲学対話の授業実践において先行する海外の研究者も指摘している通りである<sup>1</sup>。そうすることで、室井が指摘する教師に求められる臨機応変的スキルの土台を確保することができると思われる。

われわれは日常の生活の中でしばしば道徳的判断を下しているが、しかしその根拠を立ち止まって熟考したりすることは少ない。むしろその判断は多くの場合、瞬間的で直観的・情動的なものである。子どもも入学以前から「よい・わるい」の判断能力を家庭や社会で学び、訓練され、ある程度は身につけているが、その判断の源泉は実のところ様々であり、しかも多くの場合曖昧である。哲学対話は、そうして下されている日々の直観的道徳判断の根元を探究し、振り返り、吟味し、そしてよりよい判断を創り出す訓練の場を提供するものである。その意味で佐々木の(2)の実践は、興味深いものである。情動と反省的論理の対比を用いて、道徳的反応と理性的熟考の過程を、生徒たちがそれぞれ自覚的に捉え直すことで、思考の深まりを促す試みは、近年の道徳心理学、倫理学等の研究成果にも対応する新しい道徳教育の試みと言える。

人間は理性的な動物であり、道徳判断もまた怒りや好悪の感情などに惑わされず「理性」に基づいて下されるべきものである、とする考え方が倫理学の歴史においては長らく主流であった。しかし、近年の脳科学や道徳心理学、動物生態学などの研究の進展に伴い、道徳判断における「感情」の果たす役割の大きさが明らかになりつつある。それらの研究成果によれば、感情ないし情動は、

状況を認知し、道徳判断を瞬時に下し、しかるべき行動への動機づけを喚起する上で、不可欠なものであるということになる<sup>2</sup>。しかし、その一方で情動は時に判断や行動を誤り、周囲や本人に害をもたらしかねない側面もある。その点で理性はそうした情動の誤りを見抜いて、誤った情動を制御したり、情動能力を鍛えて、誤った情動が生じないように改善することができる<sup>3</sup>。こうした理性による情動制御の働きを、生徒たち一人一人が自覚化し、自らの判断力を鍛え直してゆくための一つの試みとして、佐々木実践は新しい可能性を提供してくれていると思われる。

もちろん今回の試みで残された課題も多い。とりわけ授業者側の授業観を見直した上で「哲学対話」を遂行するためのスキルをどのように向上させるかは、二つの研究実践をとおして明らかになった課題である。しかし本プロジェクトでは、それらの課題の解決も含めて、今後も道徳教育学と哲学、倫理学、道徳心理学などとの広範な連携を図りながら、「考え、議論する」道徳教育の意義を明らかにし、新たな教育プログラムの開発に努めていきたいと考えている。

#### 【参考文献】

- ・河野哲也『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』、河出書房新社、2014年。
- ・森田伸子『子どもと哲学を—問いから希望へ』勁草書房、2011年。
- ・M. リップマン『探求の共同体—考えるための教室』河野哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳、玉川大学出版部、2014年。
- ・中央教育審議会教育課程部会 「考える道徳への転換に向けたWG」。
- ・フィリップ・キャム『子どもと倫理学』柘形公也監訳、萌書房、2017年。
- ・植村亮『自然主義入門』、勁草書房、2017年。
- ・信原幸弘『情動の哲学入門』、勁草書房、2017年。

#### 注

<sup>1</sup> フィリップ・キャム『子どもと倫理学』萌書房、vi-vii頁、26-31頁参照。

<sup>2</sup> 植村亮『自然主義入門』、勁草書房、2017年、60-70頁参照。

<sup>3</sup> 信原幸弘『情動の哲学入門』勁草書房、2017年、VI-VIII頁参照。